

令和元年6月5日現在

機関番号：33925

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02426

研究課題名(和文) ルースキイ・ミール 文化共生のダイナミクス

研究課題名(英文) Russky Mir - the Dynamics of Cultural Coexistence in the Russian World

研究代表者

諫早 勇一 (Isahaya, Yuichi)

名古屋外国語大学・外国語学部・名誉教授

研究者番号：80011378

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：革命後、ロシアからの亡命者たちが国外で発展させた文化は、亡命文学のように本国とは切り離されたものと考えられてきた。しかし、バレエ・リュスなどに見るように、他の芸術分野においては、革命後の亡命者も、革命前からの非帰国者も、ソヴィエトからの一時的滞在者も一体になって国際的な芸術をつくりあげており、亡命という観点から見ることはできない。本研究では「ルースキイ・ミール(ロシア世界)」という概念を用いて、こうした芸術世界の特徴を探った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来から亡命ロシア研究は日本でも盛んに行われてきたが、本研究は亡命者も非帰国者も一時的滞在者も等しく「ルースキイ・ミール」の一員として捉え、反ソヴィエト的な人びとも親ソヴィエト的な人びとも一緒になって作り上げていったその多様な全体像を再構築しようとするもので、日本はもとより国外でも類のない研究と考える。

「ルースキイ・ミール」という近年新たに提唱された概念を過去に应用することは、両大戦間のロシア文化、ヨーロッパ文化を再検討するために有効であるだけでなく、グローバル化のテンポを速める現代世界の理解にも有効だと考えられる。

研究成果の概要(英文)：The culture that Russian emigres outside Russia developed after the Russian Revolution has been regarded as one different genre of the Russian culture from that of the motherland, as in the case of "the Russian emigre literature". On the other hand, the various other genres of art such as ballet were nurtured in other parts of the world than Russia by diverse groups of Russians and even by foreign artists, for example, emigres who left Russia after the Russian Revolution, and those who left Russia before the Revolution, consequently never returning to the homeland, and those who traveled abroad, remaining there for some time. Therefore, those artistic genres cultivated outside Russia are too versatile in the point of the characteristics of artists and their creations to fit in the traditional category of emigre arts. In this research, we aim to specify the characteristics of the artistic works of Russia abroad in relation to the concept of Russky Mir, namely the Russian World.

研究分野：ロシア文化

キーワード：在外ロシア ディアスポラ チェコ 文化の共生 亡命文化 エコール・ド・パリ モスクワ芸術座
バレエ・リュス

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初の背景：1980年代後半のペレストロイカ以降、亡命文学はロシア国内でも盛んに研究されるようになり、それは次第に文学以外の諸領域の研究にも広がって、亡命文化研究とも呼べるようになった。ただ「亡命」という語はしばしば本国との対比の中で用いられ、本国とは切り離された世界というイメージを伴いがちである。しかし、亡命文化はかならずしも本国の文化と切り離された存在ではないから、両者を包含するものとして「ルースキイ・ミール」(ロシア世界)という近年用いられはじめた概念を用い、とりわけ文学以外の諸芸術の例を分析しながら、これまで亡命ロシア文化と呼ばれてきたものを、本国とのつながりのなかで再検討したいと考えた。

2. 研究の目的

以下のような課題を立てて、その答えを追求する。

(1) 在外ロシア文化について論じる場合、言語を媒体とする芸術(代表的なものは文学だが、ドラマ演劇、トーキー以降の映画なども含まれる)と、言語を媒体としない芸術(絵画、音楽、バレエ、無声映画など)との相違はどのように位置づけられるのか。受入国に同化した芸術家の芸術をロシア文化の中に位置づけることは可能か。ロシア語使用を前提にしない在外ロシア文化を考えることはできるか。

(2) 芸術によって本国(ソヴィエト・ロシア)との関係は異なる(文学以外の芸術は、文学ほど本国と断絶した存在ではなかった)ので、その相違をもたらした歴史的原因を解明する。

(3) 「亡命者」と「国外在住者一般」(非帰国者、一時的滞在者など)との関係を明らかにし、政治的立場を越えた彼らの共同作業の実態を探って、どのような成果をもたらしたかを検証する。

(4) 在外ロシア人芸術家(文学者・言語学者を含む)と受入国(あるいは他国)の芸術家との交流関係を検証し、ヨーロッパの芸術運動(文学運動も含む)において在外ロシア人が果たした役割を再検討する。

(5) 以上の結果をもとに、両大戦間のヨーロッパにおける「ルースキイ・ミール」の実態を見極め、その特異性と一般性を考察する。

3. 研究の方法

限られた人数・申請者たちの専門分野から、時代としては両大戦間、地域としてはヨーロッパに限定する。都市としては諫早がパリ、大平がプラハ(を中心としたチェコスロヴァキア)を担当し、ともにベルリン(ドイツ)を視野に収める。芸術領域としては、諫早が美術、演劇、文学を担当し、大平が文学・言語学、芸術理論、映画を担当するが、足りない分野(音楽、バレエなど)・地域は国内の専門家を招いた研究会を行うことによって補う。

さらに文化共生の内実に関しては、諫早はパリを舞台にした美術・演劇に見られるロシアとフランスの文化的交流、芸術家と本国との交流を担当し、大平はプラハ・ブルノなどを舞台にしたロシアとチェコスロヴァキアとの交流、亡命者・非帰国者・一時的滞在者との交流を担当して研究を進め、両大戦間のヨーロッパにおける文化共生のダイナミクスを明らかにする。

4. 研究成果

(1) 在外ロシアの芸術に関しては、絵画、音楽、バレエ、無声映画のような、言語を媒体としない芸術は比較的受入国に理解されやすく、芸術家たちもその地で名声を得ることができたばかりか、それぞれの地に同化していったが、言語を媒体とする文学、ドラマ演劇、トーキー以降の映画のような芸術は、ロシア語を知らなくては十分理解できないので、読者や観客は限られて、作家や俳優たちは在外ロシアで閉鎖的なサークルを築かざるをえず、受入国に広範な影響を及ぼすことはできなかった。

(2) 諸芸術のなかでも絵画は、イデオロギー性が強くなかったために、ソヴィエト当局の厳

しい検閲を受けなかったばかりか、美術家は 1920 年代でも比較的自由に国外に出ることができ、在外美術家に関する研究もソヴィエト国内で禁じられていなかった。さらに出国した美術家たちは、1930 年代になっても本国に帰国して芸術活動が続けることができたが、ファリクの例に見られるように、帰国者の活動はかなり制約されており、全面的な自由を謳歌できたわけではなかった。

(3) 演劇に関しては、ベルリンのキャバレー「青い鳥」のように現地の人びとに歓迎された例は少なく、多くの在外ロシア劇団は言語の壁による限られた観客数に苦しめられた。そうした中で成功するためには、ロシア語を捨ててフランス演劇やチェコの演劇のような他国の演劇に身を投じるか、映画のような新たなジャンルに転じるかしかなかったが、ミハイル・チェーホフのようにハリウッドで映画俳優の演技指導で名をなした例もあった。

(4) 音楽では、(本国への帰国を促す)帰国推進運動が積極的な活動を行っていて、プロコフィエフのように実際にソヴィエトに帰国した例もあったが、ストラヴィンスキーやメトネル、ニコライ・ナボコフのように国外にとどまって活躍した音楽家も少なくない。音楽は絵画よりもさらに言語や国民性の影響が薄く、インターナショナルな性格が強いからと考えられるが、同時にかならずしも調性にこだわらない 20 世紀音楽自体の性格とも関係があるだろう。

(5) 自叙というジャンルは在外ロシアでも盛んだったが、亡命前にすでに教育を終えた世代にとってロシアの過去はしばしばノスタルジーと結びついていた。それに対し、今回着目した子ども世代の自叙(在外ロシアの中等教育機関で大規模に課せられた)は、トラウマとなるような体験が多かったために、過去を描くことをことさら拒否したり、あえてフィクション化したりする傾向が見られ、自叙と自身の体験の叙述とはかならずしも重ならないことが確認された。

(6) 革命後、ロシアの映画関係者は大量に出国し、ドイツやフランスに独自の映画会社を設立して無声映画を制作した。無声映画の時代にはロシア人の俳優たちも活躍できたが、トーキーの時代になるとドイツ語やフランス語に堪能でない俳優たちは淘汰されていくが、映画会社自体は受入国に同化し、さまざまな実験を行いながら多くの観客を獲得していた。その映画の主題の中でも、祖国喪失を自分自身の喪失につなげる主題は亡命者の開拓した重要なテーマとして注目される。

(7) 文学に関しては、まだ誰が亡命するかも定まらない 1920 年代前半のベルリンが、さまざまな立場の芸術家たちの交流の場として有名だが、両大戦間のプラハもヤーコブソンのような非帰国者、エイヘンバウムのようなソヴィエトの学者が亡命者たちと交わっていた場として無視できない。またベームが率いる文学結社「庵」はチェコの詩人たちも参加する場で、庵の詩人たちによってチェコ語の詩が訳され論じられていたことは文化の共生を示す一例だろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 10 件)

諫早勇一、在外ロシア芸術家と本国：演劇を中心に、ルースキイ・ミール 文化共生のダイナミクス(科学研究費助成事業報告書) 査読無、2019、9-25

大平陽一、戦間期プラハの文学結社「庵」とアリフレト・ベーム、ルースキイ・ミール 文化共生のダイナミクス(科学研究費助成事業報告書) 査読無、2019、131-166

大平陽一、プラハ国民劇場のロシア人ダンサー：亡命ロシア文化と芸術家の同化、ルースキイ・ミール 文化共生のダイナミクス(科学研究費助成事業報告書) 査読無、2019、167-190

諫早勇一、意外性、そして偶然性 ロシアへの道 、ロシア語ロシア文学研究、査読無、第 49 号、2017、233-241

大平陽一、帝政ロシアと在外ロシアの《ソコル》：体操運動とナショナリズム、天理大学学報、査読有、第 68 巻第 2 号、2017、93-104

諫早勇一、「エコール・ド・パリ」に見られる文化の共生 マレーヴナを中心に 、20 世紀前半の在外ロシア文化研究(科学研究費補助金研究成果報告書) 査読無、1026、16-26

大平陽一、1920 年代在外ロシアにおけるロシア劇団の受容について、アゴラ(天理大学地域文化研究センター)、査読無、第 13 号、2016、131-148

大平陽一、ヤーコブソンの交友関係から見たプラハ学派の文化的コンテクスト：そのいくつかの側面、スラヴ学研究(日本スラヴ学研究会) 査読有、第 18 号、2015、51-85

大平陽一、戦間期チェコにおける社会主義リアリズムをめぐる議論：アヴァンギャルド、構造主義、社会主義リアリズム、アゴラ、査読無、特別号 、2015、1-74

大平陽一、第一次亡命ロシア人の回想と世代の問題、天理大学学報、査読有、第 67 巻第 1 号、2015、19-33

〔学会発表〕(計 6 件)

大平陽一、プラハ国民劇場のロシア人ダンサー、日本ロシア文学会関西支部、2018

諫早勇一、革命と在外ロシアの芸術家たち、ロシア史研究会(招待講演) 2017

大平陽一、《十月》における映像言語の実験、人文研アカデミー2017 連続レクチャー(招待講演) 2017

諫早勇一、意外性、偶然性 ロシアへの道 。日本ロシア文学会(招待講演) 2016

大平陽一、記憶に基づかない回想：亡命の子どもたちの作文から、日本ロシア文学会、2016
諫早勇一、「エコール・ド・パリ」に見られる文化の共生、日本ロシア文学会、2015

〔図書〕(計3件)

大平陽一、新井美智代(編訳)、松籟社、子どもたちの見たロシア革命 亡命ロシアの子どもたちの文集、2019、288 ページ

中村唯史・大平陽一編、水声社、自叙の迷宮 近代ロシア文化における自伝的言説、2018、288 ページ

ウラジーミル・ナボコフ 奈倉有里・諫早勇一訳、新潮社、マーシェンカ/キング、クイーン、ジャック、2017、151-429

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：大平陽一

ローマ字氏名：OHIRA YOICHI

所属研究機関名：天理大学

部局名：国際学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：20169056

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。